里見八犬傳

第三輯

卷二

へ13
709
12

遠門
709
12

明治三十年
十月九日
購求

南總里見八犬傳第三輯巻之二

東都　曲亭主人編次

第廿三回　犬塚義遺託を諾く　網乾謾歌曲を賣る

犬塚信乃戌孝ハ伯母夫大塚墓六が家ゑ移居しより。嫌忌の中ゑ日を弥り年を送れバ。里人ゑどゆハ親しくも和らぐ。只彼百姓糠助のミ。舊馴染と伯母も許しく。信乃が故ゑ疑ハぞ。その性愚直なれバなり。現この老人ハ信乃がゑゑ言葉敵ゑなるめるゑねど。愚なる隨偽らぞよろづゑ實意あるめるれバ。信乃ハその木訥の。仁ゑちゑを愛しく。その門邊を過る日ハ立ゑ寄安否を問ひ。初ゑかゝくぞ交參けり。かゝる程ゑ糠助が女房ハ去歳の秋ゑ長兄病著なりけるゑ。究竟く寒家ゑあるれバ。果ハ藥價積りぞこのよゑ

信乃ハ糠助ガ圓金一両を贈與く。藥料の資ガ乞ふ。されども墓六亀
篠ホハこれを乞ふ。さるぶ信乃ガ今ハ父番作ガ
送せる番作貧かりしかど身ハ清かりし後ガ又ハ鎧櫃の底ガ圓金十両
ありこの金三ッ一ッ乞ふ茶ノ湯ガ充よ。その他ハ竊ガ腰ヨ纏て身の為
又友のるガ肝要のるあバ用ひよと書送しう。亦是後の後まで慮りし
親の恩戴く金ガ湯と沸人涙と共ガ袖ヨ藏しく。亀篠ホハこれを告ぶ。貯
禄ありや。と問まつれ。その金三両を出く。棺槨墓碑の料とす。又父の三十
五日を吊ひけう霄ガ復一両を伯母ガ遞與く。法延酒食の料とせり墓
六ガ亀篠ガこれらの金ヨ我を折く。ふ有りや。と問しこれ是のミと
答しふさるふんとぶひつ。その後ハ問ざるう。かくこの七八年伯母夫婦と同
居きるまぶ彼番作田ハ名のミゆく。ふぶ為ハえるぶ舊衣を

の〻被せく不自由るまどとのるるけれど美味美服を楽ハざるる親乃
遺財を減らせるるしかれども彼糠助ハふぶ犬子四郎ガるガ就く憂を
俱ガせ一日もありけるその艱難を救ハども我只彼ガ負くと
思ひとるく竊ガ金を贈しふ糠助夫婦ハ感涙を禁めあくまで只管信乃を
伏拝てその信義を賞嘆し茶剤を求ふ用ひしかども定業るれバあや。
その妻ハなるるるガ乞ふ今茲七月の比より糠助亦時疫まくうち
臥せしより頭揚ぶを流行病ハ傳染を懼れて人大ふよりたくまこ乞ふも
信乃ハるのびくガ糠助ガ宿所ガいるるく湯液を煎じ食享を勧め又ふぶ
暇るる時ハ額藏よるる沼さく竊ふこれを遣しふ看とふる日もありけるガ。
今その病危しと亀篠ガ告しぶ信乃ものるを取あへず遽しくいるれて
乃ふガ邪熱せるるく裏ガ入くとり乱しくるるるけれどその衰ハ日ガまとり。

さて枕方に膝を進めて。心地ハいかにと糠助阿爺。信乃が来つるハといふに
臥して熟視て。起かへらんとすなる力もなきのみ。いと苦しげにうち咳き犬塚
ぬしよくぞ来ませし。年来日ごろの懇ろに。愛憐被てありし。報ひもせで
別になりぬ。某今茲ハ六十一歳。女房にハ後れたり。貯禄もなく氏族も
なければ。後ろ安き死に似たれども。心かかりがひとつあり。といひあへずさし塞ぐ。
痞に息をとぢむれバ信乃ハ手をかへて湯液を嗳め。只管に勧しかバ糠助
咽喉を潤して。心かかりハ在とても人にハ告ざる。子のうへのこと。某原ハ安
房国洲崎のほとりの土民なり。耕作と漁猟とに身をかくして世を渡るに
長禄三年十月下旬。先妻に男児出生て。玄吉と名つけたり。いと健に
見えたるに母ハ産後の傍に肥立ず。乳に乏しかりけれバ児ハ脾疳の病つきて。
母の看病その子の抱。耕作細引を外にして。やや二とせ余りしかバ物入多くて

售殫し剰女房ハ。遂にむなしくなりにけり。迹に残るハ借銭と。この年僅に
二歳の稚児。これが為にハ字がへしいかで養ふ人もがなと。庶幾へども
貰乳のみ辛く。漫ろ稚児ハ瘦羸ひて餓鬼の如し。養ひ月銭を
贈らでハ。貰人といふ人のなければ。せんすべ盡て出来ざりし。洲崎の浦ハ霊
地として。役行者の崫あれバ。殺生禁断せられたり。この故に。魚鱗其処に
集まりて。細代なれバ生洲に似たり。竊に網を下をるれバ一夕わづかに数貫の
銭を獲ること易しと思ひしかバ。借りたる稚児を霎時鄰家に豫けて。鳥
夜に紛れて彼禁断所へ舟漕入れて曳網ハひかさるほどに人に知ら
れて忽地に捕られ。国守の廳へ牽れけり。悦るべき路のなければ。柴漬の刑に定られ
且く獄舎に繫れしに。折もよくその秋ハ。国守里見殿の奥さま五十子の
上及ちん愛女伏姫うへの三回忌に当らせ給へバ。俄頃に大赦を行ひて。

吾倩も死罪を宥られ軈く追放せらるゝ日迴守のあん慈悲ふかく村長ふ領られる小児玄吉を返し下さるゝたゞ多くの鄙言ふいふ難有迷惑已てを得ぞ雅児を負ひ抱つ安房を追き上總を過ぎ下總ゝ行徳まぐ来る途の艱難乞食熟後ば親も子も餓労れて せんまぐ来ぞ役行者の惜せふ必鱗を洩りし冥罰ハ多かくても 脱ぎぞ途ふ仆まく死恥を曝んより親子共侶身を投るそやを らめと思決めて名も来ぬ橋の欄干ふ足を踏み。跳没んとする 折武家の死脚と駕死人件の橋を渡るかりく遠く抱死禁め推引 居く懇ふ縁故を問れしふ。讖悔の為ふ恥を忍びて一五一十と告ふ ゐん。その人笑くふく憐く原来汝ハ素よりの悪人ゆハあらざりけり。これハ 鎌倉殿足利成氏の御内ゆく小禄卑職のあるとても。聊慈善の志願

ありその故ハ年今四十ふ餘るまで子ハ挙ぐら子一月の。さるバ年来 夫婦心を合ふまく。神仏を祈念し一奉ア又月ふ稱べれるハ人乃 艱苦を救んと心ふ誓ふも久しくゐりぬ命ふ沈ハ殊ふく一子をもく あまり。親子ほらく死んとせり人さるぐの浮世ゑ然らバその子を見れよ 泣させよとも かくもゐく叫んとよふ遮しくらいれしふその時の悉さ息 絶くくまゐふぬ舌ゆゑ。説盡さぐとも察しゐ地獄て逢し仏欲神欲と 思ハ更ふ一議ふ及バをそぐいかまくふ兼引く只感涙を推拭へぞ彼人 かさゐく。られハ敷のもん死脚ふて。安房の里見へ赴れる。かゝさるれぞ 私ふ雅児を推ろく。このゐくりゆハ定宿あり。家あぐふ相譚く。且く その子を預け置鎌倉へ立かゐく。妻の女ゆもようを告日あらぐしく 迎とゐべし。ゐくふその子ハ焦悴くまとゐ武蔵ゐる神奈川ゆ。小児五歳

九清堂蔵

糠助が蹴悔
物語窮客
稚児を抱えて
身を投んとせし

の幼茉あり。これを用ひば效驗あらん既ゐ親子とるべくんゆゑられ等間ゐ
字育んやけ。ゆゑ寝安さく思あく。志をうとあふべとく赴たね。と喻しつ。
路費ゐせよとて。懐中ある。方金二顆とり出し。昏餉の料よ狄腰ゑ纏さる。
割籠と共ゑ賜しぶ。辞まるゐ。ようゐ受納め重くの恩義を謝しく。
玄吉を賺ゐつゑ遁与せぶ。ゆゑゑ抱たとりく。舊茅しかゑ立虜をつく。
つとゑ送ゑ。ところ欲しくも悲しくて。見ゐん親子一生涯の別ゐれども。養
親の名をも問ゐ。ゆゑ。名告ぶ。ゆゑゐ。恩愛の重荷をぶ
あるしても。喝ぬ名残ゐ葛飾の行徳濱より便船しく。江戸の津ゐ赴たん。
聊相識る人ある。この大塚ゑ流れ茅く。農家ゐ奉公ある。移よその冬和
君ゐ生涯ゐ。かく次の年。この家の先住ある。籾七とらゐ。ゐ方ありて。
後家ゐ入夫を招るとある人ゐ媒妁せられ。その名迹を續られども。一朴

瓢ハ何でも一朴。年中未進を債られく。水飲あくぬ痩百姓人ゐ鳴呼乃
白物。と貶しめらるとても腹くぶ。故郷で釀せし。禍ハ貪の盗の谷るれば心を
切く貪ふぶ。只正直を宗とく。朝ゐくゐを合せ小角さゐ。罪障を
勸解ゐるも十八年。その毎月の會日ゐ鹽鰯でも箸ゐかけぶ。其精進も
年黙送ゐハ誰ゐ玄吉ハ羨ゐく生育かく人ゐくなくこの人ゐゐれと願ゐ
ゐくふ去歳ゐ妻ゐ告ざるく。妻ゐ告ざるゐぶ子のゑ人を。今臨終ゐ口走り。和
君ゐ告るハ凡庸ゐふぬ信義を豫くゐるとゐるりかくゐバくく風を追ひ
景を捕ようゐ度果敢ゐ凡ゐ子のゑ人をゐるゐゐあふ孫ど鎌倉の前管
領家。持氏成氏を。ハ番作ぬゐの主筋ゐるぶぞやされバ亦成氏朝臣ハ西管領
山内顕定ぬゐ。扇谷定正ぬゐと不和ゐく。鎌倉のゐん住ひかゐハせゐハど。
許我の城ゐ移ふせ玉ひ其処をも追ひて迫ゐろハ千葉の城よりまゐと

世の風俗ふ倣へ伝へ。ちゝ母ハ子玄吉もその養親も役ふ後ひ下總千葉ふあゝんどゝん和君ゝ許我殿成氏をへ糸り玉ふるのありくその便宜をもて玄吉を識るとあゝバこれらのよゝを潛ふ伝へくゝゞゝ子ハ実の親あるよゝをちゝゞくゝゞゝ兄非もかゝ灰ふ伝へ伝へくるのあゝバ些ハ心ふかるべゝよゝや目今環會とも親子迭ふ面忘ゝ名告よゝゞあゝざめゝど。渠ハ生れあゞゝふゝく右の頬尖ふ痣ありて形牡丹の花ふ似ゝり又渠が生まゝる七夜ふハ祝ゞのゝゞ釣せ。鯛を庖丁ちゝゝふ魚の腹ふ玉あゝゝく。文字のゞゝれあゝえゝり。取く産婦ふ讀せふこれまゝゝ訓む信の字ふ似ゝるゆゝえゝといゝゝよゝそこ渠が臍帶ゆゝ共護身嚢ふ納めゝ。長禄三年十月廿日延生を安房の住民糠助が一子玄吉が初手臍帶並ふ感得秘藏の玉と毋ゞゝゝ写ゝつけゝる圓字ふゝく釣ゝ折の。

曲りゝゝとふも讀めゝべ。渠物情を知るゝゝゝ失ゞゞゝ今なゝあゝん。これらを證据ふ云ゝゝひてふ紛れあゞくもあゝゞゞかゝ。ゝゝも孟ふゝゝるゝふてゝ傷痛くゝゝれけゆ今朝ゝゞゞバ舌強ゝくゝとれ程ふハ拙ゝれゞゝゝふ。今和君が面を見ゝく心地清ゝゝく見えるも燈將ふ滅んとゝく光を倍の類ゝゝゝべ。末遥なる弱冠ふゝゝゝ見バ勉ゝく裴跡ふゝゝゝ頻ふ落涙をゝのゝへ賢者の言の葉ふ鳥の將ふ死んとゝるゝゝゝゝ鳴とかゝく。人の將ふ死んとゝるゝゝゝゝゝ善とゝゝ。糠助が今般の辞も生平ゝゝ大く云ゝゝてあゝれ賢く学ゝゝゝゝ。信乃ハ彼玄吉が痣のゝゝ玉のゝゝ。ゝゝ者ふゝゝひあゝせゝ。大ゝゝゝゝゝ感嘆ゝ。噫阿爺よゝゝゝゝゝけゝゝゝ。ゝゝく云ゝゝ者が素生悟く改めゝゝ。年来の深信精進人及ざゝゝふゝん。加旃子息のゝ人ふゝゝと暗合ゝゝゝあり。過世の契りと見えれバゝゝゝぬ

兄のもちそさを。折をるバ下總へ勅ふく。その宿所を雲ふ養父の姓名と
もくぞとのふとも。證据ことぐく分明なるバ。環會ざるとふあらじ。れちれとと
念とせず。ちぶ〳〵湯剤を用ひず。夜も来ず看病せまほしれど。親類ふ
奔宿をゑれバ。そのふ任せぬるをえり。さぶれ下〳〵び諾とる。辞ハ金石変改
る。ちろ安とく思ひず。と心ゝるほさるくふ勦ず慰めとりけれハ糠
助ハ賞をこち合〳〵拜むのゑ。哀情智ふ塞りてや。復りふるをもふうり
けり。かくてまや。黄昏ふなるふけぬバ。信乃ハ行燈ず火を点し。再び湯剤を
勧めふどん。別を告く宿所ふ還り。その夜額蔵ふのゑ。糠助ゞ遺言の
よりを物かたり。玄吉ゞ痣のるゞ。玉のるゞを告ふけぬふ額蔵ゆゑく驚噴し。
こ見ず吾黨の人ゑゝんるゞ疑ひるゝ。この為ゞ隨ゑたるるゝハ今ふも其処へ
勅ふく。見まほしくそゆへと密語めぬ立別ぬ詰朝ゝく起く。糠助と坊ん

ゝせふ。その近鄰の荘客詣ゑく。糠助ハこの暁ふ別ゞかりゝるゝ。と告ふ
けぬハ信乃ハ殊さふふ。れを悼ゝて。ちぶく墓六ゑ説勸め。永樂銭七
百文貸與ゝ。その夜道場へ棺を送ゝせ日子歴ゝ。その家を售ゝれふ。
件の七百文を返〳納させ。残ぬる銭と最福ある田圃ハ彼道場へ寄進
ちゝく。糠助夫婦。そぶ代ゝの。香花の料ふちゝりけぬこのるゞ荘官墓六ハぶ
計ひて。その鄰人ふ指揮ちゝぬど。実ハ信乃ゞ墓六ゑ説勸めたるゝ。と雖
ふふるく。僉知りゝ。この人荘官さゝんふ慈善ふく下を伸云ゝるれ
らぶるの父母ゑるべ。ゝく代りゑゝ。といハざるあハなるとけり。不顯管領
家の退糧人ふ。細乾左母二郎とふ壮佼ありけり。近元比ゞで扇谷修理
大夫定正ゑ仕ゝく扈従ゝり。便佞利口のあるぬバ。ゞとびハ寵用せられゝ
人を戕ふとヨヌかり。よりて。傍輩ふ強訴せられゝ。忽地ふその非義覆覺れ

軈て追放せられけり。さば又母ハ徃に世を逝り。いまハ妻子もあらざれバ遂に遠縁のものをよるべに大塚の郷に流浪ひ来つ糠助が舊宅を購得て形のごとく膝を容るゝ菴ハこの左母二郎ハ今玆二十五歳にして面色素く眉目秀て鄙にハ稀なる美男なり。その迹ハ大師様とかいえて草書拙からず加旃遊藝ハ今様の艶曲。細腰鼓一節切なんど習ひうかゞひとの条て。す。犬塚番作身まかりし後里に手跡の師匠なければ左母二郎ハ毎日に手習子を集て生活とし。又女の子にハ歌舞今様を諭るに浮たる技を好む女の都も鄙も多かれバその跡におして遊藝の弟子日々に聚来つ打雜し舞ふ程に是首の少女彼首の孀婦と仇なる名さへ立もあれど。亀篠ハこれ見し時より。漫に好む技なれバ左母二郎がするとしいへバとかくし夫に執成により。渠を憎るものなりといへども蟇六ハ快らぬ態しつゝ遂に

烟乾を追ざりけり。かくてその年の終りに城主大石兵衛尉が陣代簸上蛇太夫といふものが身まかりぬ。次の年五月の比蛇太夫が長男簸上宮六亡父の職禄を賜りて。新陣代になりにければその属役軍木五倍二卒川菴八など共に夥の若黨奴隷をゐて。彼此を巡撿し。その夜ハ荘官蟇六許止宿しけり。蟇六ハ豫てより。饗膳の准備して佞媚賄賂さへ怠らずとりわき勸盃まゐて礼に過たり。折しも庚申なりければ亀篠ハ夫に勸めて烟乾左母二郎を招よせ。庚申守に假托て。歌曲の遊楽を催すに女兒自慢の癖あるものハ濱路にハ殊更に花やかなる羅衣被せてこりなくその席に侍らせ。或ハ酌を執らせ。又筑紫琴を奏させ左母二郎ゐハ例の艶曲を謡せり。されば濱路ハかゝる席に侍りて[illegible]もせぬ人々に馴々しく物をいひかけられ縝烟乾と臂を連ねて。おのが拙き絃のまゝ

亀式賓客達ふ聽せんるの信乃がいろんとのをゝくて。心裏恥しき限ありれ
とも。親まハ爭ふべくもあらぬ。困じく絶ふ一曲を奏つるふ陣代簸上宮六ホハ
眸顔蕩けく燈燭と光をあらそへども愧ぢ。眼を細くゝく濱路をかゝり見
声を太くゝてその節奏と誉ぬ。扇を短くとりて。節を拍ー。鼻下を
長くゝく延の流ゝを笑ふぬど長短細大我を忘れく。驀然と笑ひこの
ゝ真。今宵の管待ハ美酒もいまぐ美を盡さぬど。膳部もいまぐ善を
盡さぬど。唯令弱の一曲のゝ。玄の又玄。玄賓僧都も。聽聞せば墮落せん。
妙の又妙。妙音天女も。合奏せば攫を投ん。吁有がゝの音樂やありろの
今の音樂や。と訛声合ゝく謡ふるん。濱路ハ慚く。且腹さゝしふふ其
れよ沼堪ぢ散動ふ紛まて。減るぶぬく退見けるさまハホ左毋二郎ハ管
領家の退糧人るまとも。宮六ホハ鎌倉へ在番せゝめのならざれハ。決ふ

こまて式識るとあゝ。細乾ハその性浮薄ゝかる遊魚の席を累ー。嗚呼の
浪子るるとけまバ虚辯ときく媚を呈ゝく。盃を勸るふ趣あり。又ろく秀
句を吐ろく笑ひを催ゝ。宮六ホ式稱ゝて殿とのひ檀那と唱へ墓六と大人と
稱ゝ。亀篠を奥方とゝ。給事の奴婢を姉様と喚び。下男をまで先生と
ふ稱呼繽紜德操ふ見。見輕薄児の習俗ろりまぐくかゝやゝ乃
席まハ声色を嗜ざる。老実者ハ愚形るぶ如ー。彼紂王が比干をあて。不
肖とゝ。又傭忽が混沌を不具とゝひゝとまと同じ。かまバ信乃ハこの夜さろ。
子舎ふ引籠く。燈下ホ兵書を繙くのゝ。その席ふ入ゝねども。墓六も
ホこまて式同ふ。故よりそふふ。陣代まハ信乃がるるを一句も披露せ
ざるまけり。かくゝ鷄鳴曉を告る招ふ。稍盃盤をとり納め。墓六ハ宮六ホふ
乗ーと敬ひ謝ゝく。更ホ早飯を勸るま。宿酒いまぐ醒ざれハ各よくゝを食

山崎文庫

えきく
艶曲を
かれ
催しく
ひき
蟇
ろくけん
六權家と
かて
管待を
ひろと宮六
いさり庵八
ひき六

みさと五倍二
たまぢ
亀さく

ハど。かほど彼此を巡らんとして。三人齊一ど出れハ。蟇六ハ遽しく。その從者に
うち雜りて。村盡処まで送りけり。是より先に亀篠ハ日待月待の折に
觸れて。網乾左母二郎を招きつ。艶曲を聽く程に左母二郎ハ早晩に濱路と
看て思ひを售し。人目の関なきのびくに言葉の露を結びかけて淫しき
色をみせ。或ハ赤鳥の跡を媒妁にて。筆に物をぞいはせける。いかなる物を
書たりけん濱路ハよみにも觸れざりて。いとゞいたく罵辱しめ。後にハ網乾が來る
毎に避て再び面を對へず。現人の性なる習ひにもよらざりけり。されバとの
少女ハその心ざま親に似ず。行ひよろづに負くて。信乃ゆゑハ親の口づから豫て
許せしよしあれども。それさへいまだ婚姻をとり結ざる夫なれバ。疾に親く
おいらず。況て浮たる風流士に。名を立らるゝ事あらバ。女子の恥辱このうへ
あらじと。ふかく念じつゝさりげなく人を引入ざる母親と心づきなしと思ひけり。

さゆよりて。簸上宮六ホが止宿せし夜。二親がこゝろありてか濱路を給仕に侍らせ
らして左母二郎共侶に琴よ曲子と晴がましく。酒宴の興をそえさせける。
かと朽をしくおもふ人の諫を用ひざる。親の氣質に推辞かねてぞ出ぬれ
羞きと歎かれ。稍一曲を奏し。濱路ハかくのごとくなれども。母亀篠がこゝろハ
異なり。亀篠日来おもふやう。件の網乾左母二郎ハ鎌倉武士の浪人とか聞ゆ
ゑくいと愛たき美男なり。渠がいふよしを聞くに。鎌倉にありし日ハ食禄
五百貫を宛行はれつゝも。近習の首にありしが。殿のおん寵大かたならで出頭
第一なりしなれバ。儕輩なく媢て黨を樹。頻に讒言せられしより。身の
暇を賜りしかども。原是殿のおん志にハあらざれバ。近きに召返さるべき御
内意あり。この里の僑居ハ霎時が程にあらんといへり。この人今ハ窶たれども
その言のごとくならバ遠からずして帰参せん。管領家の出頭人を吾女婿に招ん

るゝその時あハ及びなく。今より情を被人るゝ後の栄利となるとあるべし。親の
心を子ハ知らぬ。鈍や濱路が只管ゝ信乃を良人と思ひとりてや婚姻を結ぶべ
しゆゑ曩ゝ六つけーるのあり。可惜女児を可愛氣のるゝ甥ゝ下口
るまゝ。田蛭ゝ噬入らるゝ如く引放をゝ血ゝ血を洗ふ後こそ痛ふ
態進てハ
るゝん此ゝ由て彼を推せゝ。細乾ゝ濱路ゝ意ありとも後この害ゝ及ぶべ
濱路が信乃ゝ情を寓てゝ火後さゝ人ゝ憑ーるゝ。又利を捨て男を取る
とも。左母二郎ハ美男なり。ゝ迹愛ゝ遊藝さゝ何暗くゝ音曲妙ん
これ糅中の糅なるゝ。信乃と同日の論ゝハあらぬ。大年ゝ吾倩ぐゝ
良人ゝるゝハ思業も犯んかゝ。ゝハ濱路ゝ信乃ゝ絶ゝる細ゝ
細乾ゝまゝゝ。ゝゝ世の嘲をも里人ゝ憤ゝをもゝゝ。折ゝ
鱗ゝ事ゝ托ゝ。ゝ細乾を招ゝ左母二郎ハ懲ゝゝ且ゝ親ゝ

副馴ゝ。濱路をゝ入ん。ゝの色ゝゝ。要緊のゝある
日ゝ亀篠ゝ招ゝ。ゝゝ使ゝゝゝ。ゝ墓六ゝ逢ゝ時ゝ
両中ゝゝ木屧を脱ー。斗米の爲ゝあらぬ。ゝ折る腰の低ゝれバ荘
官夫婦ハ只顧ゝ。その侍眉ゝ紙敬ひく。貳ゝゝゝゝゝ

第廿四回

軍木媒ーゝ荘官ゝ説く
墓六偽りて神官ゝ換を

却説陣代厳上宮六ハ曩ゝ荘官墓六ゝ女児濱路を眷憐てより。
恋ゝの慾火禁めかゝて。寤ても寐ても忘られぬ。媒妁もがゝと思ふ
氣色の坐ゝ顕ゝゝけゝハ媚ゝ勢利を昔ゝるゝ。ゝ属役軍木五
倍二傷ゝ人の死折をゝゝ。宮六ゝ人ゝひあれバ色ゝ出づ色ゝ出
ゝハ人もゝるゝ。某屬者尊公の氣色ゝよゝく。既ゝその意を察ー

なり。そハ必墓六が女児なる。濱路とやらんがうまるべし。槐門貴族の姫上なるべ及びそれなるもあるべし。尊公配下の一荘官。そが女児のうんたのらぞ。なでふれそなを労しなるふ及んの。娶ゑまのうんとなるべ某媒妁仕ふん。一トたび言を信くるべ墓六敬びく兼ねべし。尊意如何と密語ハ宮六莞然とうち笑ふ。寔ふ和殿の察知の如しさぶ。濱路ハ墓六が一女なり。且聟ゑもありと作のけば輙くハ兼ねべるれとの故ふ思へぞ。なるべるるまぞふ和殿ゑ怪しめられしんとらべハ五倍二小勝を進めそまハ尊公遠慮ゑ過なり墓六ハ配下の荘官倒さんとも起さんとも公乃ハ。そなるまるふあるん余ふハ聟ゑ改ゑてこぞ。婚縁を結ぶべし。巣り遅とーく迷ひを取ふハ見自滅を招くなり某これらの利害ふよりく。説ぶ必後りんはてなるやとくそひとるへと諸良ふ肯ふゆぞ。宮六斜なるまぞ敬びく。次の日種この聘物を。七八人乃奴隷ふ舁ちく軍木五倍二を媒妁と。私ゑ墓六が宿所ふ遣しなり。さふ祝ゑ五倍二ハ墓六許諾なるく。躰こあるべふ對面し。籤上宮六が懇望の旨ゑ趣婚縁の一説を述ぶ。只管ふ説勸るふ墓六早ふ応せぞど。且荊妻ふ相譚てともかくも仕ふんといひけく退ぞしが。俟ゑ半晌あまりあり。やうなくふいでまろ五倍二ふ對ひていふ。ゆゑ媒妁の趣を濱路が母ふも示しひけ寔ゑそひけもなく。よるべ御蔭を庇るる。籤上大人懇ゑ濱路を娶ふんとそなるも亦重更ゑ媒妁と賜りしハ親子が僥倖ゑまるハあれども。さくふ之なるの難義あり。ノ塚信乃といふのハ妻亀篠が甥なるふ。云云の故をもて。雉子より養ひとり濱路と養子妻ふく。職禄を讓らんと契約しくひふ。當時證人數あり。素より信乃を女聟ゑまるハ。ゑぶ夫婦の情願ふあるぞ。又濱路が情願ふもいハ。

只、里人ホゞ見貧者ホ已ニを治むゝるり。かゝバ信乃を遠離て後ホ至るまで、
義氏仕ふめといハせもあくぞ五倍二ハ冷笑ひいろく趣胡乱ようや驚きぎ
あるゆもせよ。一トゝろゝホ付くときハ言を西端ホ寓るるホ似ろう。簸上氏へ
婚縁を結んと云ふる。偽ようれりのるゝふ治定の返答ホひゝ後よ
彼婚がゝ式遠離るとも遅きホあるぎ某不肖ゝれども。當城の属役ろう。
陣代の為ゝ媒妁しく。胡乱の返答ハ代ゝろ。迷ひを取ふ和殿ゞゝ人ゝ冥
罰ハ速ゝるゝんホ當坐ゝ決著せゝれぬハいふぞや。と威ゝゝろく。墓六忽地ホ
顔色蒼ゝく。歯戦ゝ。答んゝるホ沿いふ見ゞゆうゝるくホ我よかゝりく。いろゝぞ
太刀息を吻れ軍木公説得ゝく理あり某短才魚目鈍なれ再び得ゝ死
女児ゞ婚縁いろゝで推辞をゝんゝ只その故障あるゝ式ゝゝ後ゝ迷ひて
されバ件の障を穏便ホ除んゝ。容易ゝハゝかゝゝとゝるゝ親子のゝるゝ。

後ゝまゝく簸上殿のゝん為ホゆへハ苦心ゝく計ゝゞゝ且その期ホ至るまで。婚縁
の説を秘ゝのゝひ私仰ゝゝハ背ゆゝゞゝとのゝホ五倍二面を和ゝゞ。いろく趣ゝてゝろえう。
早速の兼諾ハ某さんホ面目ゝるゝ。性急ホ似ゝゝとゝも。吉日ゝれバ陣代ゝゝ。
贈ゝ聘礼の件ゝ齎しくいゝるゝとゝいろく目録を遽ゝまゝホなゝ外面ゝ存ろ
軍木ゞ若黨主の咳を暗号ゝく。件の聘物を運び入ゝろ。処陝まで縁類へ
ゝろくホ並ゝえゝう。墓六ハゝとんゝうゝんく。月ゝち騒けゞ。辞ゝろふゝゝろ。
受書を写めく。五倍二ホ遞ゝんゝ。歓びの盃を。進せんゝく奴婢をゝろゞと。
五倍二急ホ推禁めゝるゞ彼障礙を除ゝぐ賀酒ホ時を移さゞ忽地園
宅のゝホゝろゝまゝく。後ゝるゝを行ひゝさけん。簸上殿もいろゞかゝう。待ゝゞゞく
ゝてゝゝハゝゝめ。饗食應ハ且く預けゝくゝや罷らんと身を起せゞ墓六ゝ。ゝゝり
と応ゝく敢ホゝゝ式禁めゞ恭しく額をゝ礼倉卒至極迷惑千万ゝゝゞ

再て来臨まさず。預り侍ると先にたちて玄関の板敷まで送りて出つゝおのゝ
名の墓に等しく身を平めして臂を張り。頭を撞定に千秋萬歳と逆に
祝し。祝されて留る男媒人ハ披く扇に夕日影土用近つく俄晴長柄舁し
従者にハ吹入る風に蒼め人ぞ主の後方に引そふさり。蟇六ハ見送果て。
そが住裡面に入る程に窺聞たる亀篠ハ女子ら紙門を推ひらきて彼種
種の聘物を顕めく数てうち微笑を吁めでたくの結納やとの人バ蟇六ハ手を
抗て音高し。人めや聞ん濱路と信乃ホにもしらせぬこの品々ハ大祇ととく
うち被ひてなんぞやわん身且く張番せよ。こゝも土蔵へ運び入れて長櫃の中に
隠さんあるやく。と焦燥ハ亀篠ハ忙しく。袱紗めてすゝめて。被されバ蟇六袴
の稜を結挾して袖巻揚。女児にみせぬ聘礼物ハ親のくさ彌く抑搏母が
竊によろこん布の和名ハひろめえん鯣よりるほ重宝ハ鰹の脯こゝてハさゝける

直うちあり。時に亂衣張られしハ飾附の白髪苧よりるほ素なる白銀こ。
まで生なて二十枚。こゝに並びて巻衣五本綾ゆやおくん錦袂と木口を
見るのに解く隙あり。白木の基台ハあくもがふとるに拘ゝる中ハ置れまゝ左
右に引提て蔵の戸口を出て入たうるが拘ながら夫婦して盗むがよえ心配ハ。
その度毎に人や見ると問へバ。また比より鶏鵡久しふ歎あらくぞ。ことが
らも腰折れん疲労足辛くも隠し蔵めけり。時しもあんる夏の日なれバ奴婢ハ
彼此に睡臥。濱路ハ納戸に只ひとり洗衣を熨斗てをり。信乃ハ菩提院へ
詣るとて。郷に出るがいまだ還らず。只額蔵のみぞいづ処よりをさけん蟇六が
彼品々を運び隠して後に見まバ客房の次の間に単衣の領を繕ゐたり。
蚤を捻て居たりける。程に其の夜さり。あるじ夫婦ハ臥房に入て臥たり。
箙上宮六が婚縁のるえ密語て。信乃を亡ふべき計策を商量こと。當

下亀篠ハ匍匐伏て。枕につゝ絨摑かくまで愛られつるなるべしと神ならぬ身
のこゝろぞして。これに豫て思ひしハ彼網乾左母二郎ハ管領家に仕へし禄
賜りし出仕人なりしと伝のえさり又云云の故をもて退糧人となりされども
云云のさちあれバ遠からずして鎌倉へ召かへされんとみづからいへり渠が
濱路を眷る目ざし。その情あるよしをバ知ぬべし。さらに稀なる美男なれバ濱
路も終にハ信乃が事を思ひ忘れて彼人と情由あらバ。と淫奔を誨る事ハ
あらねども些の情を被てからバ彼人帰来せん時にそれ我の利益ハあらん。
来ありつゝあれ野行るまじども。濱路と信乃が間を堰く柵にするものハ親の
護る目の隙なきより外へさてろ戎らゃし繪の浦の網乾に濱路の女松蘿
留侍よまほしめなし。とおもひしハそら憑めなく。今ハ渠さへ障のそのゆゑとなりて
たのむそのやあらん男熊ハ美もあまし召かへさるゝや返されまじや固より不定の

痩浪人と威徳ときゝ城主に等しき陣代殿とも親ならず。悔しかる哉
あてけるも舌うち鳴らせ蟇六ハ起直りつゝ戎又死つらく物を案さるに
濱路ハ今の女の子に似げなく。鄙言にいふ馬鹿正直信乃を良人とおもひつめて
貞操をも立かねまじ。渠が氣質を推するに。それハ網左母二郎が袖を曳とも
志ばし移もせざらん。されあん身ハ阿呆にかしく見も效もせしるなるべし。濱
路が網乾と情由ある哉認りや。と潜に問バ亀篠頭をうち掉て。いな網乾
うそ情を運ぶ。濱路ハ何とも思ハぬやうなり。信乃とぞ情由ハ見れもせね。
去歳の秋糠助が死向とせし比に信乃が子舎よりをし忙しく濱路が出るをちらと
みたりしよりぞ後ハ由断せず目鞋外しく護る程にそれほとらべ由ようおもねど。
己前に野合し欤とふかく邪魔になるものハ信乃一人ようそ持らめとのへず
蟇六嘆息し。莊客們が口舌しるに當坐脱もの知りぞに濱路を信乃に

妻せんとのひつるゐの悔ーさよ。寔ふロを禍の門の擅ハ一年ふ十尋廿ヨ尋爰る
ものひ延ゐ元陣代の性急ゑいふせんぶ只速ふ信乃を亡ひ後安ちくさ固
ーそよけ是為術あゐんと眉をよせ。霎時頸を傾ヨバ遠寺の鐘の声とも。
蝸ふとり著く蚊の叫ひ其知ふ三ッ四ッ六ッ七ッ。家裡の人ハ定りく夜ハ九ッヨ
なのゐよけり且ーく墓六ハ頭を擧く莞尓と咲ゑ。亀篠いゐぐ尋思ハあゐ
ぎゐ。ヨ是妙計を生ーゐりとのゐヨ亀篠起直りく。その妙計とハいゐあり
るゐぐと傾る耳弑引よせく。顧ふふ信乃ハ頗思慮あり。熟く渠を討んゐ。
苦肉ヨあゐざヨぶ施ーがさー。抑前管領成氏朝臣ハ番作信乃ふが主
きぢゐ是ばこれヨよゐバ計ゐゐべーさてゐ足利成氏朝臣ハ持氏のあん
子ヨくむゐ結城落城の後討ヨ滅ひ。春王安王の弟あゐふ成氏
尚永寿王と稱せゐヨー。宝徳四年の春京都將軍の恩免を蒙ひて。

鎌倉ふ立ゐり。六代の管領ゐりふその重臣根管領扇谷持朝ぬ。山
内顕房ぬと睦ーかゐぢ。君臣相攻るヨ年ゐりく。享徳四年六月十三日。
（一云康正元年。）成氏竟ふ鎌倉の御所を放火せられぬひふ下總國ふ赴ゐ猿嶋
郡許我の熊浦といふ処ふ屋形弑修理ひ。ゐりヨ移ヨぬふり。許我の御
所ヨぞ唱ゐる。かくく又文明四年ヨふ成氏朝臣山内顕定ぬヨ。許我の城ヨ
攻落ヨ是ーく。同國千葉へ没落ー。千葉陸奥守康胤を頼ゐてゐ。
今茲（文明十年。）西管領ヨ。ゐん和睦の淺整ひて。許我へ帰城ゐぬひと世の風声ふ
隠れゐー。これ今ヨ是ゐのるふよりて。信乃を云云と欺ゐく。神宮河（稼）
出さん。ゐん弟ハ荀ヨ昔の間ヨ。竊ふ左毋二郎が宿所へいゐるく。箇様こふ
ゐらんヨとの謀合期せバ。彼村雨の宝刀を畧るべー。これハ是苦肉の一計。
尤施ー難ーとのヨども。如此せざれハいふふーくふ。剔ゐ彼奴を賺ーゐるべゐ件の宝

刀ハいまだ手に入らず。又額藏に如此々々と説示し。途にて信乃を亡せん首尾よく計る如くならバ。濱路を陣代へ嫁らせんとて左母二郎に口説あるべし。渠が狂ひなく威勢を憚らず妨するゝ事あらんにハ。簸上殿に訴て搦捕さするもいと易し。只むづかしきハ信乃がゐるゆゑ必曉られなんと。そのびくびくに説示せバ。亀篠やがて感嘆し。寔に浮雲き所為なれども。あん身ハ壮なりし時よりまさしく水煉ハ達者也。老てハ初に劣るとも。船頭に賄賂して資にせバ過失あらじ。綱乾と謀るハこゝろにあるまじ復宜なるべしとて給けり。かくて夫婦ハ安堵さて陣代を聟にせバ村長のみならず。威徳城主に等しかるべし。吁楽しやと。欲の溢るゝ笑を洩さじと常口に推當て。迭に耳を取りし。相譚果しぶ夏夜の曉近くなるまでに蟇六も亀篠も慾に疲労果て。小くねむりぬと思ふ目睡けり。されバ亀篠ハ。次の日未下刻。里の不動堂へ詣ると偽りてひとり漫に背門より出て。窺ふに網乾左母二郎が宿所に赴き。外に立在て窺ふに。習子にハはや退れまして。歌曲の弟子ハひとりもあらず。只ひとり柱に倚て一節切を吹てをり。折よしと進み入れバ左母二郎見かへりて。忽地笛の手をとゞめて。珍し。何の風の吹よせてや。みづから訪せ給ひけるぞ。いざこなたへと立迎へて花筵を披かへ。上座へ推居まゐらすれバ。亀篠ハ莞尓として。いはなひつゝかゝれ彼此の一議あり。おん身が智恵を借んとて来つ。其事ハ窃に詣まうし。外へ心をつけてえどりぬに綱乾ハさぐり知る。出居の簾引おろし。そがまゝ奥へ坐をとゞめて間近く耳をさしよすれバ。亀篠声を低しくいひいでさるゝものどもも。おん身が濱路と情由あることハ。豫て知るめれど。こゝろきどもハ誰も彼も。よるにあるまじるゝハ。待らざらず見損てゞふ。あからさまに。此を聟がやとまづくとゞも。いつにせん濱路と信乃が稚きとき。如此々々のことありて。

里人ホヨ媒妁せられ夫婦ヨせん。ヒらひ号ー。言葉ハ今さら反故ヨ為るべ。
荘官ヨのもちろまハちん弟を愛しく。信乃がるくバ。壻ホせん家を嗣せん。
信乃ハ妻の侄ホ。箇様ニこの怨ある。番作ガ子ホ。あまべ。こがるヨたのる
あのまハあくまでいぐく彼奴を遠離く。ちん弟を壻ホと豫こよろのふまーとの
空ーくで。如此ニヨ計アまバ。信乃ハ他郷へ赴くべー。就てハ渠ガ稚ル時ホ
壻引出とく取ふせころ。荘官どの。秘蔵の一口。世ホ類なる名剣をとり復
さんとふくども。明く地ヨ求めくるを。よりてこれホ計りるん。
ちん弟も亦これホ相計ひく。荘官どの佩料のく。信乃ガ件の一刀を揭賢て
こびてんや。勿論ちるるこの一刀も長短を豫く量アてその用意ちるからバ。
鞘ホあひくれるハあくーど。事ちるとれハちよなる幸ひちん弟ガ為ホ侍らぞ
ーと虚言実事ろり雑へ辭巧ホちらちるバ左毋二郎ハつくくと伺んく愧

る面色ちく。額ホるを當流吟ーたる。頭を擡く四下を見かへり。人ガまーく
ふふ且ビハかる密事をいふまく。佛こーく相譚ちるん。ところるくゆ。さガき
某娘さるホ懸想せごろホあらざるとも。鮑の貝の片思ヨて。彼君ハ人と強れ
顔ーこそ情由あること宜ホハちん目鏡の曇ヨるなるん。さるを某化骨
折く首尾ヨく大刀を揭賢ちるも。娘さるのほも亂づよくハ。家尊父
母もせんさビあくーん。この談ハいふホと。期を推せバ。亀篠ほくと弁笑ひあ
鈍まーや。粹ヨハ似げるー。信乃ガそこビるくんるる。濆路ハ誰ちる憚るべき。
渠ガ靡くと靡うぬハさビくちん弟のちろホあくん二親の知るるヨハ侍
らど。親の許さぬ夫ホ連て。逃亡るるの世ヨなかり。況親ガ壻ガ。ホ定て
後ハ睦ーれも。睦ーかくぬも揖を執る。夫の才と不才ホあり。こまハ見江湖の
ちろれどちのくん我ひのこ。ちろハガ目ホちく情由あくん。とんもちん弟と

濱路ゞるハ衆人妬む姿の池の波のうゑ〳〵浮草ゝ竿さゝ舟の隔るた。
終ゑ知らゝゝよりざるんや。期を推さゝ欽とうち笑へバ左毋二郎ハ頭を
搔ゝ。ゝゝ作ゝけバ理りゝ後のゝハ後ゝゝ。ゝゝ要緊ハ大刀のゝ容
易の呼ゝゝあゝざれども命ゝかえて仕ゝんとゝゝゝ亀篠ゝゝゝく
欽び更ゝ額をゝち合せゝく。その日の暗号事の首尾ゝゝハ如此ゝ彼ハ
亦。箇様ゝとおちゝゝく。耳語ゝ。点頭ゝ。ゝゝゝ時を移せゝゝ亀篠ハ
遽ゝく別を告ゝく走ゝ出躰ゝく宿所へ還ゝゝ。竊ゝ事の趣を蟇六ゝ告
ゝバ蟇六ゝく欽びゝく只顧ゝ亀篠ゝ口才を稱嘆ゝかれハ信乃と謀ゝふ
易かり。面白ゝく。ゝと含咲ゝてゝゝけ。かゝくその日ハ暮ゝゝゝ蟇六亀
篠ハ信乃を閑室ゝ召ゝくゝゝ。曩ゝハ里の誰彼ゝ和殿ゝ濱路を妻
せよゝゝく。ゝゝく催促ゝゝゝども。豊嶋家の滅亡ゝより。去歳ハ世間静

なゝゝゝゝゝゝゝども。ゝ引せゝり。ゝゝゝゝ今茲ハ。許我の御所成氏朝臣西管
領家と和談整ひ千葉ゝゝゝ熊浦へ帰城なゝせゝゝゝ。ゝゝ祖父西
仇ゝハ成氏の御舎兄春王安王両公達の近臣ゝゝゝゝゝて番作も
父と共ゝ一旦結城ゝ籠城ゝたり。かゝゝゝゝ素ゝゝ彼御所ハ和殿ゝゝゝ
主ゝゝゝゝゝども山内扇谷の両家と不和ゝゝ鎌倉を追落され。許
我ゝゝゝ身を置ゝゝ。千葉を憑ゝゝゝゝせ一程ゝ當城のぬし大石
殿も鎌倉へ出仕ゝく。西管領ゝ属ゝゝゝハ許我殿のゝゝゝ。噎ゝゝ
ゝひ出かゝゝく。ゝゝゝゝゝゝゝかゝく今茲ハ件の御和談整ひて。
世ハ長閑ゝゝ。道もいと廣く形ゝぬ大塚の家を奥さゝゝハ抑今ゝの
時ゝゝゝゝゝゝ年来のゝゝ存念を告るゝり。ゝ氏いふとゝゝ。
和殿ゝ立身のたゝゝゝゝゝの村両の宝刀ゝまゝゝゝゝ。ゝゝ氏推乃て

許我に赴き由来を述、先祖の忠死を訴、その宝刀を献らバ召出されん
も疑ひなし。和殿許我に留らバ、これ遠からずして濱路をおくり遣すべし。
又留らずして立かへらバ、聟養子の披露して職禄を譲るべし。さる時ハ大石
殿も村長にてやハ措ん。必諸司の上にたゝせられて、陣代にもせられん。欲これも
和殿が徳によりて忽地面をおこしつべしと思へバ、亀篠・僑より。吾儕夫婦は
男児なし。ちからと憑むハそなたのミ。為これとおもハぬよりハ、ことなくよろこび
察して、六月にいる旅なれバ、いと堪がたく侍らんが、許我とても遠き境にあらず。
善ハ急げと俗にもいふよく思ひ起すべしと誡して、安ふに勧めたり。信乃ハ軍木
五倍二が殿上宮六がために媒妁して、濱路に聘礼物を贈りし。本日の事の趣を
額蔵が胴窺て、くらそのあるを告けるに、今亦伯母と伯母夫が年来窺ふ
念抵被る村雨の名刀を許我の御所へ進らせよと、只管に勧るを原来
これら武出し遣りて、濱路を宮六に嫁らせて、死底心なるべしと言下に暁りて、
莞然と笑て、不肖の某かくまでにおん慈愛を被ること、いと歓しく、そのうへ村
雨の宝刀のことハ両公達のおん像見にくゆへハ、折もあらバ許我殿へ献れと親も
いひゆれ。されバこのこと二がさの仰なくとも、申出して、おん指揮に任せんと思ふ
折から云云と宣ふこそ幸ひなれ。現讒にも寸善尺魔といふことのあれバ、
明日発足仕らんと早速言葉にあらぬ夫婦ハ大かたならず、うち歓び、心をそ
ろのせられてハ、吾儕もおなじ歓びなれども、翌といはゞあまりにかくに行装も整ひ
かたし。暦を繰て日子がよくハ明后日と定めたまへ。従者にハ背介・額蔵と
二人に一人遣すべし。わが愛しとて雑せよ。信乃ハ忝しと恩を謝して、臥房へ
子舎に退けハ、額蔵ハ庭の草木に水を沃だけくあり。折々そよけさと招くに
よせ、縁類に立わかれてから。今蟇六亀篠はまつはれしける。これが思ふまさえに言葉

せはしく耳語ハ額藏がくちに點頭ぬ。定に推量するのみならず。おん身を下総へ旅
させたく後ざなく彼婚姻を執整んとするなるべし。只痛しきハ濱路どのゝ當今の
少女子ハその心操有がたきまでおん身を慕ふとなりながら。夫婦一朝ふ
捨る仇結びなる妹夫の緣。後の怨ハいかならんといふにも信乃ハ嘆息し。
人木石ふあらざれバ思ざるにあらねども。女子ハおしなべて水性なり。この人ふ
添ても。緣るより早かり。某ぶとふさだまたなるバ。親のこゝろふ從ふなるべし。大丈夫
たらん者恋慕とらく一女子の生涯を慫まんや。再び濱路が事を思ふへ時なし。
只うち捨てゆかんのみ。といへバ額藏さそと應て躬く立つる庭の曲
掃く箒ふ信乃ハ裡面まで入てける。さる程ふ亀篠ハ脚絆よ笠乃紐
とく信乃が起行の用意して。濱路ハさくろ進ねど親の指揮ふ裁て縫ふ
二田山本綿の単衣。涙を包む袖形よ縞も千行の濃縹縫してお身まへて

何時までかと曳遣さる糸の端結が緣しの揭ども。あらバ犬まじ夫を返し縫ひ。
一個刺縫て又一個胸まてハ堪ぬ抽ぎひをかくも。あなる數々せり。かくてその次の
日ハ信乃が行装も大かた整ひ。當下亀篠ハ信乃が子舎ふ来ていふやう。
假初ならぬおん身が心願殊さらふ初旅のことふしあり。人のちからの及ばぬあハ。
愛敬と危難あり。發足も翌としいへバよろづに暇あらねども。親の墓へも
參詣し又瀧野川の辨才天へも。參りまうでといふに信乃ハ菩提院へハ今
朝やかまぬ現瀧野川なる辨才天へも。某幼稚き時ふ母の病著平愈の
祈願をかけ奉ることもありつ。忘れもしられず。あらねども生平ゆくハ詣るを稀ん。
仰ふ從ひゆかんといふに亀篠外面瞻仰て急ぎざらバかくさふ暮んとくくと勸
れハ信乃ハ衣を更めて例の両刀を跨へ。いそしく宿所を立出て。さる程に信
乃ハ只管に路を走りてその日申の左側ふ辨天堂へ参りつ。瀧垢離よ

身を浄めく。雲時神前ふ黙禱し。舷く下向ふ赴く程ふ途のゆくての田中ゆて。
ゆひ〻ケ谷く蟇六が網乾左毋二郎を伴て老僕背牧ヨ漁網を被肩せ。ゆ
こ戎さ〻く来ふあひ〻ろ。蟇六ハ一反あまり。さのさよう呼ケて信乃ヨ和殿ハ
心願あまバ。瀧野川詣ゆる。と申しふ果しく〻ゆく遭ゆたとの間ふ信乃ハ
遽しく。笠を脱く進近つれ。こハ夕さ〻ろく漁猟ふ狩何処へとく赴たゆハ。
と問バ蟇六うち笑く。されバよ。翌ハ和殿が首途ゑ餞別酒の肴ふとく。
彼此を問せ〻ど。魚屋ふハ折ふ〻ありといへり。故ふ俄頃ヨ網をかろ〻く。翌
の肴狩獲んとゆひく。忙て宿所戎出る折。網乾生ヨ訪ま〻ハ誘ひ立て
来ゆる。和殿所要ハ果〻ん。いぎわろ共ふと。先ふ左毋二郎も會釈〻
只管勧めいぎ〻ゆひ〻り。便是蟇六が。豫く巧る奸計。さまぶ曩ふハ亀
篠ふ勧さ申く。信乃を瀧野川へ出遣り。月〻して蟇六ゆ。漁網を背牧ヨ

被肩せく。宿所を出んとゆる程ヨ。暗号ふよりく左毋二郎ハ門邊より伴ま
ゆ〻ぶて田中ゆ。信乃ふあふ如くふ来ゆ。かくまでふ謀ゆぶれハ信乃が疑ふとあやとて。
根つよくハ巧し〻。信乃ハ斯忙〻れ。さゆ漁猟ヨあ〻ざ〻ん。底意ハ知ぞ
伯母夫の。ゆぶゆる網をかろ〻。留別酒の設ヨ。ともく伴るれバ推辞ふよ〻
形く。困ゆ〻ふ打つれ立く。神宮河原へ赴ケり。蟇六ハ豫てより。相識る
家ゆく船を借ヨ一人の揖取。土太郎ゆ〻ふ。あ〻ふ乗ら〻とゆる程ふ
忘ま〻ゆと小艇を拍く。遽しく背牧を近つけ。嚮ふ宿所を出るゆ〻ハ只管ヨ
さゆ〻ゆ早ゆく。偏提割籠を忘れゆ。汝ハ走一走ヨ立ケり。彼兵粮を
取く来ヨ。急げ急げと焦燥バ。ケゆる。と応ゆ〻ぞ。家路を投て走去ケり。
蟇六ゆく欺詐く。背牧を遣ふ。信乃左毋二郎共伯ヨ伴の船ふ乗移れハ
土太郎ハ櫓を取て。河中へぞ漕出を。當下蟇六ハ懦祥ゆふ脱更て腰蓑と

著竹笠を戴き細を引提て艦に出バ。左母二郎ハ茶を煮んとて褊小なる曲突に向ひて。生柴折て火を吹く程に蟇六ハ壮年より。我生を好まざりしかど。

ちなみに細ハ鯉に隨ひて。江鮒鮠なんどの獲物。板子の上に引揚られて。左に反右に反ること。隙なくいと奥深。さる程に日ハ暮て。十七日の月いまだ升らず。船中且く暗き。蟇六ハ豫てより。巧偽ることなれバ奥に乗ること。ものちかく只管ひうちなんと細ひろ共に身を跳らせて。水中へ陷ること。衆皆吐嗟。と驚死驚ぎて。板子を投入れなどすれども。水面暗く其処とも辨ずして。信乃ハ有繋に伯母夫の溺るゝ状ハ忍ビがたく。衣を脱捨て。波を披て。飛入れバ。揖取の土太郎も。續て次と飛入ぬ。蟇六ハ少荘より。水煉に長ず。且く水底を潜て。右に左に。細の緒を解流し。信乃が跳り入るに及びて。忽地に浮揚れて。漂ふ如くなれば。信乃ハ。これを救んとて。蟇六が袂取れバ。

蟇六も亦信乃が腕を楚と捉て放さじ。深水へ引て只管に推流れ。程なく土太郎亦資なく。陽に蟇六を救ふ如く。底意ハ信乃を水中に亡んとして。信乃ハ雑兵に。よろしく水馬水煉歩渡に。心みごとなる。膂力を義秀親衛に。劣るべくもあらざるハ。御曹司に賞縁る土太郎を。一度あまり。疎流して。蟇六を肱腋に掻迫て。頭を挙て。見るに船ハ遥に推流されて。迫つべくもあらざるに。蟇六を抱揚て。左に右に。働して。向の岸に泅着て。蟇六ハ大力に抱縮められて。鶏に啄れし雑魚に似て。水を飲ざる用心の。しるく。阿容として。引揚られて。程なく土太郎も泅出て。著て。信乃と共に蟇六を倒に引上て。少選水を吐せ。傷の小屋に扶入れて。薬火に暖め勦て。そゝ中に土太郎ハ流て。船を追留て。河原を下へ走去ぬ。

程なく左母二郎ハ。裸にあハせしるのあるにバ。船の流れを尋ねて。河下へ辿りて。

左母二郎
土太郎
若内乃
計蔓六
神宮河
浪も
信乃
ひき六

その鞘を信乃が副刀の鞘釘を抜とり。又墓六が副刀の鞘釘を外し。ゆるくまた
抜放く。此彼を引替て。鞘に納んとする刻。怪しむべし。信乃が刀の中刀より。
氷氣忽然と立沖て。裏表は寒き袖袂。膝も蹙け。稀世の名刀。毛骨
ゆよ。竦可き。左母二郎大江の驚ぬ。彼人は故鎌倉管領持氏朝臣の重
寶に。村雨と名づけられ。一刀あり。一ト度び抜て抜放せば。忽然として氷氣立
殺氣を含くして。振ふ刀尖より。漬れる。その水さながら村雨の木抄を洗ふ
ごとくなれば。村雨といふとぞ。さるに今この信乃が刀。彼村雨と相似たりかれば。この
是刀。初は墓六が重宝なる。故ありて信乃に與へ。といひたれば偽なく。一旦結城に
搨籠りし。信乃が親番作が春王安王両公達より。領りし物なれば。彼村雨の宝刀
なるべし。これをもて故主扇谷殿へ獻ぶ。即帰系のよしをもて又人に賣與ば
その價千金なるべし。墓六とこの焼刀を認れるまゝ。宝の山に入り

空手。他人の物に成たるとぞ。領れ又忙しく。その刀の鞘打を外して
墓六が刀と比べるに。反も長も相似たれば。僥倖と。竊に秘ひ遽しくこの刀を墓六が
鞘に納め。又信乃が刀を取て。この刀の鞘に納め。又墓六が刀をもて。信乃が副刀の鞘に
納るに。孰も長短なし。柔より。脇差として恰好し。浩知に上太郎は流を紙に追蒐
まつ。岸の夏草。紅葉して。喃伊と。呼ぶ程に左母二郎は。見えつ。隠つ。
械を操て。くしく。船をよせ。上太郎内りと乗移て。舊の辺に漕戻し。
そのとき船後の笹に左母二郎は陸に登て。墓六が安否を問ひぬれば
亦犬塚信乃はその思慮才学人に超て。片時も由断せしに。あらねと墓
六が入水せしは。計て。くして。戒顧せんとて。構取の上太郎を。豫て竊に相
譚て。如右せしとのこと。ひく。船中に在る左母二郎が。村雨の名刀を。揭
皆人とは。ひもうけて。船の舳を結つけて。ゆく。衣を取て。穿け。ゆく。両刀を

取く腰ゐ帯さるのゝ事倉率の間ゐく。さるも夜中のうゐ。あ丑ゞ援救ても
足ぎりけり。鳴乎惜むべし。親も子も。手柔獲し宝刀るれば只寸隙の由歟ゐ
よりて。他るゐ落るハ時運なるべし。

作者云。神宮村ハ豊嶋郡。今の王子村より北のゝ。十七八町ゐあり。とゐ河あり。
神宮河とゐ蓋その地ゐよりく名つけるのゝ。水上ハ戸田より落く。千住ゐ至り墨
田河を歴く。海ゐ入るゝ。神宮の西のゝ。豊嶋村の河ぞひゐ豊嶋信盛の館
の迹あり。今ハ鋤まく。幾ゐ迭れり。嘗長禄長享の地図を考るゐこの河の南岸
なる村ゝ尾久豊嶋。梶原堀内十條一本千條稲附。志村ホの数村ありく神宮
村ゝ。按ずるゐハ。梶原を誤るゝ。今神宮と書ハ古実ゐあゝをかれハ神宮の
舊名ハ梶原堀内村なるべし。とハ丑盗の辨なれば。この半頁ゐ楮餘あるハ。

里見八犬傳第三輯巻之二終